

成瀬仁蔵先生御病中の食事記録を通して一大正8年

○徳野 裕子 本間 健 (日本女大)

目的 漢方医全盛時代には食餌法が重んじられたが、大正時代は薬の処方箋のみで食餌箋は与えられていなかった。これは現在の在宅療養の場合と同様である。しかし再び滋養と健康の意識が高まった時期でもあった。この現在と似た時代背景の中で記された末期の肝臓癌の食事記録を調べることにより、今後の食事療法を中心に終末医療の方向性の糸口を見つける事を目的とした。

方法 成瀬先生の食事記録を中心に、健康・栄養・人間関係に関する資料、並びに大正8年を中心に医学・栄養学両分野の資料を収集。また現在の食事療法と比較検討した。

結果 この記録は、末期癌で不治の病であることを告知されていた成瀬先生の大正8年1月10日から死去される前日(3月3日)までの食事と病態であり、病人食の研究の為に行われたものであった。具体的に分量が示された食品は少なかったが、出された食事は全て記され、おいしく食べられた・半分食べられた・普通・極少量・全く食べられなかったの5段階評価がなされていた。この時期は微量栄養素が発見される前であり、三大栄養素のみの食事療法であった。先生への食事箋も黄疸に対する療法で脂肪の禁止とたんぱく質の制限であった。しかし、実際できるだけ好きな物が作られ、食事をさせることに重点が置かれていることが推測された。その結果、亡くなるまで意識ははっきりしており食事ができなくなったのは死去される4日前であったと推測される。現在でも肝臓癌の栄養管理は補液中心であるが栄養素に拘るのではなく、好きな食べ物・好まれる触感・目で楽しめる物と言った食生活におけるQOL(生活の質)に注意を払うことが大切であり、患者さんの気持ちを優先させた総合的な食事療法の必要性が示唆された。